

## <牧会ミニ通信>No.1

六月第一主日の礼拝から、事情が整えさえすれば、「ハイデルベルク信仰問答」を採用したいと願っています。既に、昨年暮れから「ハ問答」を取り入れる準備はなされてきました。(配布する準備は整っています) 礼拝において、司会者が「問」を読み、会衆が「答え」を読んで応答する形式になります。

「ハイデルベルク信仰問答」が成立するには、いくつかの時代的な背景がありました。

一つはプロテスタントとカトリックが対立し、ヨーロッパの各国で宗教戦争が起きていたことが一つの要因として挙げられます。

ドイツ・アルザス地方で、二つのグループが、絶えず喧嘩していました。フリードリッヒ3世は、それを悲しみ、自分の信仰的立場を守りつつ、他派の人々にも納得していただける信仰告白の必要に迫られ、神学者「ウルジヌス」と牧師「オルビアヌス」とに協力を求めました。

彼らは聖書を綿密に調べ、聖書はどう福音を理解しているかを熟慮して、まとめたのが、ハイデルベルク信仰問答でした。

もう一つの要因があります。14-18世紀まで、10年ないし20年の周期で、ヨーロッパにペストが流行し、全人口の3分の1が死に絶えたといわれます。当時の修道会の合言葉は「メメント・モリ(死を想え)」でした。

そうした事情から、ハイデルベルク信仰問答の問一は、「人の生きる時も死する時も唯一の慰めはなんですか」との問いから始めたのです。

実は、黒死病はヨーロッパに災いだけでなく、精神的にも経済的にも、ヨーロッパ社会を新しく造り変えました。

ローマ教皇庁の権威は低くなり、人々は古い絆から解放され、ルネサンスが生み出され、やがて近代社会に至る道筋を切り開いたのであるとしたら、世界的影響を与えている悪性コロナウイルスの「パンデミック」は何を人類に挑戦しているのでありましょうか。